

【研究ノート】

本学教育学科・短大幼児教育学科 2015 年夏期短期海外研修の成果と課題

Achievements and problems of the 2015 short-term overseas summer training
in the education department

金子健治* 北口勝也* 金子正子* 西谷有香* 堀美和*

KANEKO, Kenji* KITAGUCHI, Katsuya* KANEKO, Masako*
NISHITANI, Yuka* HORI, Miwa*

要旨

武庫川女子大学文学部教育学科・短大幼児教育学科は、米国ワシントン州にある St. Martin's University と友好的な関係を結んでいて、8月に実施される3週間の研修プログラムに毎年20人から30人の学生が参加している。本研究の目的は、2015年に行われた研修プログラムの成果と課題を明らかにする事である。研究の目的を達成するために、参加学生対象の事前、事後のアンケート結果、事前指導を行った担当者の指導内容と所見、引率助手と海外研修担当助手の指導内容と所見から、研修の成果と課題を明らかにした。その結果、学生はこの研修に高い満足度を示し、異なる文化や英語でのコミュニケーションについて大きな学びをしていることから、この研修は大きな成果をあげている事がわかった。今後の課題としては、研修プログラムに休日や振り返りを入れる必要があること、そのために不要な内容を削除すること、健康上の問題が発生した場合の対処や事前指導をより効果的なものにするための改善などが必要である事が明らかになった。

1. 問題の所在

武庫川女子大学文学部教育学科・短大幼児教育学科においては、米国ワシントン州にある St. Martin's University (以下 SMU と省略) と友好的な関係を 30 年以上にわたり保ち続け、8 月には本学学生が SMU で約 3 週間の研修をし、5 月には SMU の学生が本校を数日間にわたり訪問をし、授業に参加している。この相互交換プログラムは 30 年以上にわたり続けられていて、双方の大学にとって、特別な価値をもつものであると言える。しかし、このプログラムをとおして、学生が何を学び、どのように変容していったかということや、プログラムをより効果的なものにするためには、どのような改善をしたらよいかということについて検討はされてはこなかった。学科のプログラムとして運営している以上は、そのプログラムの有効性について評価し、必要に応じて改善する必要がある。

2. 本研究の目的

本研究の目的は 2015 夏期短期海外研修 (以下 SMU プログラムと省略) の実践から、その成果と課題を明らかにすることである。

3. 本研究の方法

本研究の目的を達成するために以下の事を行う。

- (1) SMU プログラムの概要を明らかにする。
- (2) SMU プログラムの事前指導、引率、事後指導などに携わった全ての教員、助手がそれぞれの指導内容と所見を明らかにする。
- (3) SMU に参加した学生に事前調査、事後調査を行う。
- (4) 以上の事を総合的に判断し、プログラムの改善への示唆を得る。

3. 調査期間

本研究の調査期間は 2015 年 4 月 SMU プログラムの事前指導が始まってから、2015 年 10 月の事後指導が終わるまでである。

4. 調査結果

(1) プログラムの概要

事前指導は、旅行業者による説明、英会話指導、異文化理解やアメリカの教育事情についての講義などで構成されていた。詳細についてはそれぞれの担当者から報告する。事後指導では、学生の作成した記録集を配布した。

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

SMU プログラム

8月4日(火)	伊丹空港を出発
8月4日(火)	夕刻 シアトルに到着 バスで St. Martin's University に移動 入寮
8月5日(水)	午前 オリエンテーション, キャンパスツアー 午後 州都オリンピアの見学
8月6日(木)	午前 ワークショップ1 Early Children's Literacy 午後 Mariah's Art School 訪問
8月7日(金)	午前 ワークショップ2 Early Children's Literacy 午後 Hands on Children's Museum 訪問・ボランティア活動
8月8日(土)	終日 シアトル市内見学
8月9日(日)	終日 マウント・レーニア国立公園見学
8月10日(月)	午前 ワークショップ3 Methods for Teaching Children with Disabilities 午後 乗馬体験 夕刻 退寮 ホストファミリーと対面, ホームステイ開始
8月11日(火)	午前 ワークショップ4 Early Literacy Reading and How the Library can be Resource 午後 YWCA without Limits 訪問
8月12日(水)	午前 St.Mikes Tykes Preschool 訪問 午後 教材店及び大型書店訪問
8月13日(木)	午前 武庫川アフタヌーン 準備 午後 武庫川アフタヌーン
8月14日(金)	午前 Lacey の消防署見学 午後 終了式の準備 夜 終了式とフェアウェルディナー
8月15日(土)	終日 ホストファミリーと過ごす
8月16日(日)	移動 (シアトル→アリゾナ州フラッグ スタッフ)
8月17日(月)	グランドキャニオン見学
8月18日(火)	移動 (アリゾナ→ロサンゼルス) ロサンゼルス市内見学
8月19日(水)	終日 ディズニーランド見学
8月20日(木)	ロサンゼルス出発
8月21日(金)	帰国(夜, 関西空港着)

今回の SMU プログラム参加者は学生 19 人であった。学生の内訳は短教 1 年 7 人, 大教 1 年 1 人, 大教 2 年 11 人であった。

(2) それぞれの担当者による指導内容と所見

事前指導については、以下のように分担して行った。Anita Aden 講師と金子正子非常勤講師が英語の事前指導を担当した。アメリカの教育事情については北口勝也准教授が担当した。金子正子非常勤講師は異文化理解についても担当した。事前指導・事後指導は堀美和助手が担当した。引率教員は金子健治准教授, 引率助手は西谷有香助手が担当した。また, 金子正子非常勤講師も本研修に同行し, 学生に対する指導・助言を行った。事前指導・事後指導・準備全般は堀助手が担当した。以下にそれぞれの担当者の指導内容と所見を明らかにする。

① 事前指導・準備・事後指導全般について(堀助手)

事前指導では、以下のような内容を組み合わせて実施した。

- ・海外研修参加の心構え
- ・異文化交流・体験の心構え
- ・海外生活での一般的な注意点
- ・英会話と話題作り
- ・日本とアメリカの文化の違い

参加者は英語専攻学科の学生ではない。そのため、事前研修は異文化交流・体験に対する意欲と姿勢を高めることに重きを置いた。

事後指導では、以下の内容を実施した。

- ・本研修の振り返り
- ・今後の外国語学習, 異文化交流に対する目標

学生はしおりの作成, Mukogawa afternoon の準備などで, 自主的によく動いていた。準備を通じて, 参加者の中に良い協力関係ができてきた。しかし, 一方でアルバイト, 補講等でなかなか事前指導に参加できない学生もいて, 指導に困難を感じる時もあった。事前指導の日程は参加申し込みの前に知らせておいて, 事前指導に参加する事を必須条件にすることも必要ではないかと感じた。

② 英語の事前指導(金子非常勤講師・Aden 講師)

Aden 講師により, 以下の英語指導が行われた。

- 6月19日(金) 自己紹介, 会話の始め方と終わり方, 会話を続けるコツ
- 6月26日(金) アメリカの通貨の紹介, 店やホテルやレストランでの会話の練習, チップの額と払い方
- 7月3日(金) ホームステイ先や税関での会話の練習, アメリカのジェスチャー

金子非常勤講師により, 以下の指導が行われた。

- 7月10日(金) 会話のやりとりのコツ, 相手の発言が理解できなかった場合の方略
- 研修中に必要とされる場面別会話は概ねカバーした。次年度に向けての改善点としては, 事前研修の内容をよ

り生かすために、事前研修で学んだ会話から重要な表現を抜粋し、参加者が研修中に携行するパンフレットに掲載するとよいだろう。それにより、参加者が現地でも事前研修で学んだ表現をくり返し使用し、身につけることができると思う。

③ 異文化理解（金子正子非常勤講師）

文化の違いを認識し、研修先での生活に生かすことを目指す研修を7月10日（金）に実施した。

まず、表面的な違いの背景には文化（＝各集団が持つ価値観や生活上のルール）の違いが存在することを「挨拶をする相手」を例に一緒に考えた。

次に、「もてなし」に対する日本人とアメリカ人の考え方の違いについて話し合った。日本では、「お客さま」に最上の世話をしようとするが、アメリカでは、「家族の一員」として相手を受け入れることが最高のもてなしであると考え。このことを理解しないで、日本的なもてなしをホームステイ先に求めると、互いに不満を感じる原因となってしまう。

参加学生が価値観の違いを理解した上で、ホームステイを楽しい経験とするためにどのような準備ができるかを話し合った。共働きの家庭も多いので、家事もできることは一緒にしたり、簡単な日本料理（焼きそばやお好み焼き、すき焼きなど）を作ったりすると喜ばれるなどの具体的なアドバイスをした。

また、「コミュニケーション・スタイル」の違いを意識してコミュニケーションを取ることを指導した。日本では言葉で言わなくても「察してくれる」ことを相手に期待する文化があるが、アメリカでは、言葉で相手にわかるように伝えることが求められる。その具体例として、ホストファミリーから休日にどこに行きたいか尋ねられた場合の受け答えを共に考えた。I don't know.（わかりません）のような返答は失礼になること、Any place is fine.（どこでもいいです）も悪くはないが、できるだけ自分の希望を伝えることができるように前もって考えておくことが相手に対する配慮である、ということ伝えた。

実際にこれらの学びは、ホームステイ先で役立つようで、積極的に自分の意思を伝えたり、日本料理を作ったり喜ばれたりしていた様子である。

無用な異文化摩擦を回避し、よい関係を構築するために、異文化に対する態度を学ぶことは大変大切であると考え。

④ アメリカの教育について（北口勝也准教授）

研修プログラム中にアメリカの教育・保育施設を見学する学生たちに、必要最小限の知識を講義した。クイズを出題することで、自ら考えて班対抗で得点を競わせ、学習への動機づけを高めた。問題は表1のようなもので

あった。日本の小学校・幼稚園と比較しながら、アメリカ社会の「多様性（diversity）」をキーワードにして説明を行った。学生たちは、クイズを楽しみながらも重要事項はノートを取り、熱心に取り組んでくれた。

	クイズ問題	学習内容
1	研修先の州名は？ （その他 49 の州名も）	アメリカの教育行政が州単位であることを理解する
2	ワシントン州の義務教育は何年か？	キンダーガーデンから高校までの 13 年間の教育
3	アメリカの 1 学期は何月から始まるか？	アメリカの教育の年間スケジュール
4	アメリカのスクールバスの色は？	アメリカにおける通学事情と安全に対する考え方
5	アメリカの小学校低学年の時間割で、日本にないものは？	小学校における教科、時間割、授業の進め方、昼食、休憩時間など
6	アメリカのキンダーガーデンと日本の幼稚園の違いは？	アメリカにおける幼児教育とその多様性、デイケア（保育園）との違い、ヘッドスタート計画など

⑤ 引率助手（西谷有香助手）

筆者（西谷）がこの研修中に最も気を付けたことは、体調不良者の対応である。それぞれ違う原因で3人の体調不良者が出たが、1人は行きの飛行機で体調を崩したため、飛行機をおりてから車椅子に付き添い入国した。寮の部屋が一人部屋であったのを二人部屋にする、ホームステイ先を他の学生と一緒にする、その後の飛行機移動は全て私が隣に座る等の配慮をした。もう1人はひどいジェットラグのため3日ほど嘔吐が続き、食欲がなく日中も気分が悪いようだったので、様子を見て声をかけたり、日本から持参していた味噌汁をあげたりした。もう1人は偏頭痛持ちであったため、毎朝集合時に体調はどうか聞き、偏頭痛の症状が出そうになったらすぐに休むよう声をかけた。1度だけ起き上がれないぐらいの偏頭痛がおこったので、研修先であった乗馬クラブでソファに横になれるよう添乗員が対応した。今回は3人の体調不良者が出たが、慣れない海外生活で日本と同じように過ごすことができないため、今後も同じようなことが起こりうると思う。どんなことがあっても対応できるよう、引率者はできる限り多い方がいいように思う。

⑥ 同行教員（金子正子非常勤講師）

研修に同行し、以下のような指導・助言を行った。

(a) フェアウェルディナーで歌う歌の指導

この歌は、現地でお世話になった大学のスタッフやホームステイファミリーへの感謝の気持ちを表すために送別夕食会で歌う歌である。学生たちは当時人気のあったディズニーのシンデレラの映画から、「ビビディバビディブー」を選んだが、歌詞をメロディーに乗せて歌うのに

苦戦していた。筆者は現地において3回程度歌の指導をし、学生たちは英語に強弱のリズムをつけてメロディーに乗せて歌えるようになった。また、歌につける振りについても一緒に考えた。本番では大変素晴らしいパフォーマンスを行い、お世話になった方々の感動を誘っていた。

(b) 現地の人々との会話についての助言

研修中に学生が現地の様々な立場の人に何かを伝えたいというときに、どう伝えてよいかわからず、筆者のもとに相談に来ることが度々あった。相手や状況に応じた適切な英語表現を指導した。

(c) 研修内容についてのSMU教員との懇談

SMUでの研修の最終日に、SMUの副学長や国際交流プログラム開発室の副室長、本学研修の担当者たちと話し合いの時間を持ち、今後に向けて互いの意見を交換した。研修後もメールで事後アンケート結果を共有し、連絡を取り合っている。

(d) 税関で化学物質が検知されて取調室に連れて行かれた学生に付き添い、通訳をしたり、本人について釈明したりした。

(e) 研修中の様々な場面において、生活習慣やマナーの違いについて、現場で指導や助言を行った。

(3) 質問紙による事前調査及び事後調査

質問紙による調査は事前調査が7月上旬に、事後調査は日本に帰国する途上の8月20日に行った。回答者数は事前調査、事後調査とも19人であった。それぞれの調査の概要を以下に述べる。尚、数字はその項目の選択者数を表している。

① 事前調査

質問1 海外に行った経験

1回	6
2回	2
3回	3
4回以上	2
無し	6

この結果から、初めて海外渡航を経験する学生は19人中6人であり、ほぼ3分の1である。1回以上海外渡航した経験のある学生の方がはるかに多いことがわかる。

質問2 海外に行った事のある人のみ回答

① 時期	② 期間	
大学	1年以上	1
高校	半年	0
中学	3ヶ月	0
小学校	1ヶ月	2
幼少	7~10日	3
	7日以下	16

③ 目的

友人と観光	0
家族と滞在	11
修学旅行(高校)	6
修学旅行(中学)	4
研修	1

④ 行き先

アメリカ(本土)	1
アメリカ(本土以外)	7
カナダ	1
ヨーロッパ	3
オーストラリア	2
東アジア	5
東南アジア	4

この結果から、高校時代に家族や修学旅行のためにアメリカや東アジアに行った学生が多いことがわかる。期間はほとんどが一週間以内である。

質問3 応募のきっかけ

自分の意思	17
親のすすめ	1
家族のすすめ	1

この結果から今回の海外研修に応募したのは、ほとんどが自分の意思であることがわかる。

質問4 参加の動機(複数回答)

海外研修に興味	15
英語に興味	4
アメリカの教育に興味	10
旅行に行きたい	6
友達が行くから一緒に	0
新しい友達が増えそう	1
何となく楽しそう	5
自分の視野を広げるため	13
就職に役立つ	1
気分転換	1

この結果から研修に参加する動機は海外研修に興味がある、アメリカの教育に興味がある、自分の視野を広げたいなどが他の動機に比べて多いことがわかる。

質問5 不安があるか

ある	15
無い	3
無回答	1

この結果から、ほとんどの学生が研修に行くことに不安をもっていることがわかる。

質問6 どのような不安か(複数回答)

初めての海外	4
健康	3
食事	4
寮での共同生活	2
英語でのコミュニケーション	12
習慣や文化の違い	6
家族と離れて暮らすこと	3
家族にかかる経済的負担	4

この結果から、学生は英語でのコミュニケーションに特に不安を感じていることがわかる。次に不安に感じているのは、習慣や文化の違いである。

② 事後調査

質問 1 この研修に満足したか

とても満足	14
ほぼ満足	5

学生からのコメント

- ・旅行も充実していたし、ホームステイが最高
- ・ワークショップや観光なども充実していた。
- ・いろいろ学んで視野が広がった。
- ・観光時間が少ない
- ・教育に関する内容がもう少し多ければよかった。

この結果から、全ての学生がこの研修に参加したことに満足していることがわかる。

質問 2 自分の研修の目的は達成されたか

十分に達成	7
ほぼ達成	9
普通	2
やや不十分	1

学生からのコメント

- ・ホームステイでアメリカの文化が学べた。
- ・普段のプログラムで英語を聞く、話すという目標が達成できた。
- ・アメリカの教育についてワークショップや普段のプログラムから学べた。・英語で会話する事が不十分であった。
- ・英語が十分に聞き取れなかった。

この結果から、ほとんどの学生が自分の目標を達成できたといえる。一方で、現地に日本語のできる担当者があり、その人が日本語で話すことが多かったことに対し、もっと英語で話したかったという積極的な意見もあった。

質問 3 参加費用は高いと感じるか、安いと感じるか。

まあまあ安い	1
ちょうどよい	8
ちょっと高い	10

参加費用については、ちょっと高いという意見が半数以上であるが、ちょうど良い、安いという意見もそれほど同数であった。

質問 4 事前指導は十分であったか

とても十分	9
まあまあ十分	4
普通	5
やや不十分	1

学生からの意見

- ・日常英会話、必要な持ち物についての事前指導が必要

この結果から、事前指導については、ほとんどの学生がとても十分、まあまあ十分と回答していて、満足していることがわかる。

質問 5 大学職員による支援は十分か。

とても十分	19
-------	----

この結果から、引率教員による支援は全ての学生が十分であったと感じていることがわかる。

質問 6 添乗員による支援は十分か

とても十分	17
まあまあ十分	2

学生からのコメント

- ・スケジュールの具体的な内容についてもっと知らせて欲しい

添乗員による支援もほとんどの学生が十分であったと回答している。スケジュールの詳しい内容は、もっと知らせて欲しいという意見もあった。

質問 7 最も楽しかった事は(自由記述の中で主なもの)

ホームステイ	9
ディズニーランド	7
いろいろな人との交流	3

この結果から、ホームステイが楽しかったという回答が一番多く、その次がディズニーランドであることがわかる。

質問 8 最も大きな学び(自由記述の中で主なもの)

文化の違いや多様性に気づいた	8
英語能力が十分でなくても友達になったりコミュニケーションができる	5
日本とアメリカの教育の違い	3

この結果から、学生は日米の文化の違いや多様性に気づいたり、英語の能力の不足を乗り越えてコミュニケーションを図ろうとしたりして、積極的に学ぼうとしている姿がうかがえる。

質問 9 今回の研修でつらかったこと、困難を感じた事など

スケジュールがきつかった(1日休みの日が欲しい)	4
英語で自分の考えを表現する事	2
英語を聞き取る事	2
アメリカでの食事(特に最初の1週間)	2

この結果から、スケジュールが盛りだくさんで、合間に休みを必要としていることがわかる。また、英語を聞いたり話したりする事について困難に直面した学生もい

た。やむを得ないことではあるが、アメリカでの食事になじまない場合もあった。

質問 10 この研修についての感想(自由記述の中から抜粋)

- ・毎日毎日盛りだくさんで楽しかったです。参加してよかった。
- ・ホームステイが本当に楽しくて素晴らしかったです。
- ・協調性がやっぱり大切です。
- ・本当に行って良かったと思える、人生の思い出となるものになった。
- ・毎日いろんな経験をして最高に楽しい旅行でした。もっと英語を勉強しているんな国の人と関わりを持ってみたいと感じました。
- ・自分の世界観が前と変わってとても貴重な体験でした。

5. 考察

以上の結果から、教育学科・幼児教育学科 2015 年夏期短期海外研修の成果と課題について考察をする。

まず事前調査の結果から、本研修に参加した学生の中で初めて海外に行く学生は 19 人中 6 人であり、それほど多くはなかった。海外に行った経験のある学生は高校の時に行った学生が多く、家族と旅行したり修学旅行で行ったりしていた。そのため、旅行期間は 1 週間以下である。このことは、学生が外国の文化に触れたり、人と交流したりする経験はあまり無かったといえる。

次に、応募のきっかけが自分の意思である学生は 19 人中 17 人であり、大多数をしめている。参加する動機は海外研修に興味がある、アメリカの教育に興味がある、自分の視野を広げるためが多く、自分の意思で積極的に学ぼうとしている姿勢がうかがえる。

一方、参加する前の不安も多く、英語でのコミュニケーション、海外の習慣や文化の違いにうまく適応できるかなどについて不安を覚えている。

事後調査の結果から、全員の学生がとても満足した、ほぼ満足したと答えていて、研修の満足度がとても高いことがわかる。また、研修の目的はほとんどの学生が達成されたと感じている。コメントからは、ホームステイでアメリカの文化にふれた、ワークショップで教育について学べた、英語でコミュニケーションできたなどの目的に相応しい回答を得ることができた。

参加費用については、ちょっと高い、ちょうど良いという回答がほとんどであり、とても高いと回答した学生はいなかった。この事からも学生の満足度が高い事がわかる。

事前指導については、ほとんどが十分と考えているが、日常英会話や必要な携行品についてより詳しい事前指導を求める意見もあった。

研修中の教職員や添乗員の支援については十分であっ

たと感じている。

最も楽しかった事がホームステイであり、学んだ事の中で最も多かったのが文化の違いや多様性に気がついた事、英語でのコミュニケーションである事を考えると、ホームステイを通して、学生はとても素晴らしい学びをしていると言える。

困難であった事ではスケジュールがきついという意見が多かった。筆者もスケジュールにゆとりが無いと感じた。英語のコミュニケーションで苦労した事や、食事で苦労している事はやむを得ない面もあるが、事前に十分に指導をしておく必要があるかもしれない。

6. プログラム改善への示唆

以上の事からいくつかのプログラム改善への示唆を得ることができる。

まず事前指導については、十分によく機能している。滞在中のスケジュールは、概ね現行とおりで良いが、途中で休みを入れたり、振り返りの時間をとったりすると良いといえる。そのためには、不必要と思われる内容を削除する必要がある。SMU における研修プログラムの変更については、SMU 側の担当者と話し合ったところ、変更が可能であるとの回答を得た

健康管理の問題については大きく改善する必要がある。まず、参加を申し込む時点で、健康に関する調査書を提出してもらい、引率者はその内容をよく知っておく必要がある。また、健康上の問題がある場合は、適切な対応をする必要がある。滞在中に健康に問題が出た場合は、医者に行く事に同意を得ているが、これだけでは十分ではない。健康上の大きな問題が出た場合は、現地の医者、本人、保護者とも相談の上、帰国させる事も検討する必要がある。その場合、保護者が責任をもって帰国させるように予め同意してもらう必要がある。また、健康上の問題が出た時、引率者の付き添いが必要な場合は、必ず女性が付き添わなければならない。今回は、引率者一人は男性、引率助手、同行者、添乗員が女性であったため、体調を崩した学生への対応や、空港でのトラブルにも十分な対応ができた。女性のスタッフは多い方が良いといえる。どんなに参加者が少なくとも女性のスタッフは二人(添乗員も含む)、できれば三人が必要である。

海外での公の場所でのマナー等は事前指導に取り入れる必要がある。空港などでの振る舞い方は、現地の人との摩擦を起こす可能性があるので注意が必要である。

7. 研究のまとめと今後の課題

教育学科 2015 年夏期短期海外研修は大きな成果をあげているといえる。それは、学生の満足度が高いことや、大きな学びをしていると学生が自覚していることから言える。一方で、研修内容やスケジュールについては、改

善の余地がある。今後は、SMU 側の担当者や旅行会社の担当者と話し合いながら、より良い研修にしていく必要がある。尚、アンケートなどの調査結果については参加の自由意思、個人が特定されない配慮、結果公表等を書面と口頭で説明し同意を得た上で行った。